

「荻窪の記憶」

こぼれ話なし

荻外荘と戦争

「荻外荘は戦争と深い関係があります。近衛元首相の戦争責任についてどう思いますか?」。こんな質問を、先日、英字新聞「ジャパン・タイムス」のホニーヤックさんという記者から受け取りました。

随分ストレートな質問だなと思いましたが、あらためて杉並区の発行するパンフレットを見ると、荻外荘が国の史跡に指定された理由をこう説明しています。「昭和戦前期に総理大臣を3度務めた政治家、近衛文麿の別邸」で、「重要な政治会談や組閣の舞台となった場所として、平成28年3月に国の史跡に指定されました」。パンフレットは「戦争」という言葉を周到に避けているようにみえますが、近衛が首相を務めた昭和12年から16年にかけては、日本が中国との戦争をエスカレートさせ、太平洋戦争に突入していく時期にほかなりません。まさに、「戦争と深い関係」にある「史跡」といえるでしょう。

とはいっても、「戦争遺跡」や「平和祈念館」と異なり、荻外荘が伝えるのは戦争の脅威や悲惨さではありません。「なぜ、あの戦争ははじまったのか」をめぐる記憶です。

なかでも重要なのが昭和15年7月、第二次近衛内閣の



「荻窪会談」東京朝日新聞(昭和15年7月20日)

組閣前に荻外荘で開かれた「荻窪会談」。出席者は、首相の近衛のほか、陸軍大臣候補の東条英機、海軍大臣候補の吉田善吾、そして、国際連盟の総会で、満州国が否認されると憤然と退場し、国民的な人気を集めた外務大臣候補の松岡洋右でした。松岡は、荻窪会談での合意を踏まえ、ヨーロッパでの戦争で快進撃を続けていたナチスドイツ、イタリアとの三国同盟を推し進めたため、日本とアメリカとの溝は深まります。

その年の9月、荻外荘を訪ねた山本五十六連合艦隊司令官は、近衛から日米戦の勝算について聞かれると、こう答えたといいます。「それは是非やれといわれれば、はじめ半年か一年のあいだは、ずいぶん暴れてご覧にいれましょう。しかしながら、2年、3年となれば、まったく確信はもてません。(日独伊)三国条約ができたのは致し方ないが、かくなりしうえは、日米戦争を回避するよう極力努力願いたいと思います」。

しかし、アメリカが日米交渉の前提とする中国からの撤兵に陸軍はがんとして応じません。撤兵すれば陸軍の威信が失墜するという面子(めんつ)からでした。面子や感情が指導者を動かし、多くの人間の命を奪う。ロシアとウクライナの戦争でも繰り返されている愚かな悲劇です。

杉並区は、原水爆禁止署名運動の拠点になったことから、「平和都市」を宣言しています。荻外荘で戦争について考えるのも意義あることではないでしょうか。

荻窪地域区民センター協議会OB 松井和男